



(2004年11月)

【学会活動状況】

1. 研究会開催報告

①第1回植物病理学会教育プログラム「植物病害の診断と同定」

第1回教育プログラムは平成16年8月16日(月)から20日(金)までの5日間、東京農業大学農学部(厚木市)で、募集人員の2倍の40名の参加者を対象に行なわれ、好評の内に無事終了した。初日16日は9時45分から東京農大理事・陶山一雄教授の歓迎の挨拶、米山勝美学会長の挨拶があり10時から講習会が開始された。まず、午前中の2時間は岸 國平氏による「植物病害診断」、午後は丹田誠之助氏による「うどんこ病」、小林享夫氏による「樹木の病害」と題する講話と実習が行なわれた。18時からは交歓会がキャンパス内のレストラン「樺」で和やかに行なわれた。翌日は渡辺恒雄氏による「土壌病害」の講話、3日目は午前9時30分から昼休みを挟んで14時まで松山宣明による「TLCによる病原細菌の簡易同定」、引き続き西山幸司氏による「病原細菌の一般的同定法」の実技・実習が行なわれた。4日目は午前中、根岸寛光、澤柳利実氏により「血清学的手法による病原菌の同定」、午後は陶山一雄、兼橋和央、脇本 哲氏による「病原菌の分離法、選択培地」について講話と実習が行なわれた。最終日は9時30分から眞鍋佳世氏による「放線菌の簡易同定法」、午後は篠原弘亮氏による「GLCを用いた脂肪酸分析による細菌の同定」、「アピ20の利用法」などについて講話と実習が行なわれた。16時からは飯嶋 勉氏により一時間に亘って「現場の諸問題」がスライドを用いて示され、最後に総括が行なわれた。引き続き米山勝美学会長から参加者一人一人に修了証書が手渡され、最後に実行委員会を代表して松山宣明から挨拶があり、5日間の長きにわたる講習会を無事終了した。参加者の大部分はキャンパス内の学生研修寮に宿泊したため、参加者間の交流も盛んに行なわれ、その点でも好評であった。本講習会は日本植物病理学会としては初めての試みであり、開催者および受講者に多少の戸惑いもあっ

た。しかし、学会事務局はもとより、小島 誠前学会長、大畑貫一氏、都立短期大学(古川女史)や都立農業試験場、東京農業大学の格段のご援助と東京農業大学学生諸君の献身的協力によって成功裡に終了することができたことをご報告しここに改めて感謝申し上げる次第である。

(松山宣明)

②第40回植物感染生理談話会

本年度の植物感染生理談話会は、平成16年8月20日~22日、宮城県松島町「ホテル大観荘」において開催された。参加者は約100名にのぼった。今回は、第40回の節目にあたることから、植物感染生理学の将来を見据え、ポストゲノム的な視点から研究を展開しておられる先生を中心に、以下の15名の先生方に話題提供をいただいた。「カンキツにおける宿主特異的毒素の認識機構と異物認識反応」(秋光和也氏)、「*Pseudomonas syringae*のべん毛を介した植物相互作用」(一瀬勇規氏)、「イネによる植物病原細菌 *Acidovorax avenae* の認識とその情報伝達機構」(蔡 晃植氏)、「ダイズ種子のウイルス感染による斑紋症状と色素遺伝子のPTGS」(増田 税氏)、「病原糸状菌における侵入器官形成とその機能発現」(高野義孝氏)、「ベンサミアナタバコにおける細胞死誘導因子の機能的スクリーニング」(寺内良平氏)、「イネの防御応答」(川崎 努氏)、「TMV感染に対する防御反応に関わる二つの因子：誘導物質としてのジテルペンと負の制御因子としてのMAPキナーゼ」(瀬尾茂美氏)、「植物-病原微生物相互作用におけるトランスクリプトーム解析」(鳴坂義弘氏)、「いもち病菌におけるRNAサイレンシング機構」(中屋敷均氏)、「植物の環境ストレスに対する応答」(中島一雄氏)、「糸状菌と細菌の病原性」(柘植尚志氏・露無慎二氏)、「ウイルス感染に対する宿主応答」(高橋英樹氏)、「トマト-フザリウム相互作用解析におけるコンソーシアム研究への期待」(有江力氏)。また、アレイ関連で著名な民間企業である Affimetrix 社と Agilent 社からテクニカルスタッフの方にお出でいた

だき、最新のアレイ技術についてご紹介いただいた。さらに、ポスターセッションでは若手研究者や大学院生を中心に22題の発表があり、投票によりベストポスター賞(2題)が授与された。いずれの話題についても参加者の関心が高く、会場での活発な議論がなされ、盛会のうちに終了した。また、次期開催は香川大学が担当であることが、幹事会で了承された。(高橋英樹)

③第22回土壌伝染病談話会

日本植物病理学会第22回土壌伝染病談話会は全国から200名の参加者を迎え、平成16年10月8日～10日に札幌で開催された。折悪しく、開催時期が全国各地に大被害をもたらした猛烈な台風18号の襲来と重なり、前例のない悪条件の中での談話会開催となった。初日目は現地視察を決行したものの、強風と道路事情の悪化のため予定コースの1/3(ニセコ町)で中止となった。第2～3日目の談話会(会場：札幌市かでの2・7)は、交通機関が乱れるなか心配された事前申込者のキャンセルもほとんどなく、そのうえ多数の当日受付参加者もあり、無事開催することができた。「土壌病害対策：生産現場での実用性を目指して」を統一テーマに、第一部は西 和文氏の座長の下、「新しい土壌消毒法」として、新村昭憲、竹内妙子、竹原利明、北 宜裕、竹内繁治、岸田幸也の各氏からは還元土壌消毒法、熱水土壌消毒法、蒸気消毒法の各方法について原理と効果、各地域での実践例が報告された。第二部は近藤則夫氏の座長の下、「各種作物の土壌病害に対する抵抗性品種の育成と現状」をサブテーマに、大藤泰雄、藤田正平、森元幸、八木亮治、畠山勝徳の各氏からはムギ類の縞萎縮病、アズキの落葉病・茎凋病・萎凋病、ジャガイモそうか病、メロンつる割病・えそ斑点病、アブラナ科野菜の根こぶ病について話題提供があった。第三部は高橋賢司氏の座長の下、「対抗作物および緑肥栽培などによる土壌病害防除」をサブテーマに、水越 亨、佐久間 太、酒井 宏の各氏からはキタネグサレセンチュウ対策、土壌病害対策、パーティシリウム病対策の話題提供があった。第一部～第三部とも座長の名司会により活発な総合討論がなされた。現地での台風被害を押して多数の普及現場の方々が談話会に出席され、また討論で活発に参加されたことから、生産現場からの土壌病対策研究への期待がいかに大きいかの認識を多数の参加者が共有したものである。今回の統一テーマが土壌病害解決策の一助となればと願うものである。最後に、本談話会は運営委員会の構成メンバーである北海道立農試が主体となり、成功裡に終えることができたことを付記したい。(内藤繁男)

2. 部会活動状況

(1) 部会開催状況

①北海道部会

平成16年10月21日～22日

北方圏センター会議室(北海道札幌市)

②東北部会

平成16年10月5日～6日

「コラッセふくしま」多目的ホール(福島県福島市)

③関東部会

平成16年9月16日～17日

東京農工大農学部(東京都府中市)

④関西部会

平成16年10月9日～10日 愛媛大学(愛媛県松山市)

⑤九州部会

平成16年11月8日～9日

独立行政法人九州沖縄農業研究センター大会議室
(熊本県菊池郡)

*当初、平成16年10月20日～21日に沖縄県那覇市で開催される予定であったが、台風のため上記のように日程変更された。

(2) 部会開催報告

①北海道部会

平成16年度北海道部会は、10月21日(木)と22日(金)の2日間にわたって、札幌市北方圏センターで71名が参加して開催された。21日は、午後1時30分から第195回談話会を行った。「北海道における病害抵抗性研究の最近の成果」のテーマのもと、竹中重人氏(北海道農研)からは拮抗微生物による耐病性誘導、川上 顕氏(北海道農研)からは低温ストレスによる糖代謝の挙動と病害抵抗性誘導、厩田敦史氏(北海道グリーンバイオ研)から抵抗性遺伝子源とバイオ技術の抵抗性育種について、興味深い最新の成果がそれぞれ報告され、活発な討論が行われた。また、今回の談話会では、特筆すべきこととして、中谷裕樹氏(北海道農政道産食品安全室)からは「遺伝子組換え作物の栽培について」の特別講演を頂き、「食の安全・安心条例(仮称)」の策定に向けた道の基本的考え方をお聴きする機会を得た。組換え作物の野外試験の取り扱いについては、部会会員諸氏の関心が高いこともあり、道の行政サイドから直接お話を聴きできたことは、大変有意義であったと、総括される。翌日22日には、午前9時30分から一般講演が行われた。15題(菌類病8題、ウイルス病7題)の研究成果が午前10題、午後5題に分けて発表され、熱心な質疑応答がなされた。また、午後の講演開始に先立って

総会が行われ、行事や会計等部会会務が報告され承認された。
(内藤繁男)

②東北部会

平成16年10月5日(火)午後1時～6日(水)の午後4時まで福島市の‘コラッセふくしま’を会場に120名余りの会員が参加して開催された。講演題数は29題で講演内訳はウイルス病15題、糸状菌病14題で、細菌病がゼロとなったものの活発な質疑応答が行われた。1日目の講演終了後、会場を移して参加者はほぼ全員の参加のもとに約2時間にわたり懇親会が開催され、和やかな歓談が行われた。2日目は午前最初に部会総会が行われ、庶務、会計などの報告が承認された。次期部会長には部会会則に基づき部会幹事の選挙により東北大学の池上正人氏が選出され、平成17年度の部会開催地には青森県が、開催地幹事は青森県在住の会員相互の決定にゆだねることが承認された。なお、今年度は東北部会創立40周年の節目に当たることから、2日目の午前に「21世紀の作物保護を目指して」というテーマで記念シンポジウムが企画され、部会以外から茨城県生物工学研究所の成澤才彦氏、岐阜大学の百町満朗氏の両氏に講演をして頂き、続いて部会員を代表して弘前大学の原田幸雄氏、東北大学の羽柴輝良氏の記念講演が行われた。
(生井恒雄)

③関東部会

平成16年度関東部会は、9月16日(木)、17日(金)の2日間に亘り、東京農工大学農学部(東京都府中市)において開催された。講演題数は48題、その内訳は、ウイルス病関係9題、細菌・ファイトプラズマ関係10題、菌類病関係19題、宿主反応関係4題、防除関係6題であった。本年度から参加費にも学生の区分を設けたことから、参加者は約270名(一般約150名、学生約100名、永年・名誉会員約10名、賛助会員約10社)に及び、熱心な討議が行われた。1日目夕刻には、同大学福利厚生施設「オリザ」で恒例の懇親会が80余名の参加者を迎えて開催され、会員相互の親睦が深められた。1日目昼食時に評議員会がもたれ、来年度も同様な形で開催することが了承され、技術士問題で三学会を中心に農水省等に活用要望の陳情を行う予定が報告された。2日目の講演終了後には、若手会員によって企画された第2回若手の会が行われ、大島研郎氏(東大大学院 農学生命科学研究科)、今泉(安楽)温子氏(農業生物資源研究所 生理機能研究グループ)、酒井 宏氏(群馬県農業技術センター 生産環境部)の3シンポジストを講演者に迎え約100名の聴衆を得て、活発な討議が行

われた。
(寺岡 徹)

④関西部会

平成16年度関西部会は、10月9(土)、10日(日)の両日にわたり、愛媛大学城北キャンパスにて開催され、参加者は、211名であった。一般講演は3会場に分かれて行われ、総演題数は105題であり、内訳は菌類病関係73題、細菌病関係15題、ウイルス・ウイロイド病関係17題であった。部会の運営は開催地委員長の大口富三氏、幹事の山岡直人氏を中心に周到に準備されており、昨年度に引き続き今年度も開催地委員長の提案によりノーネクタイでの参加が案内され、リラックスした雰囲気の中で真摯で活発な質疑応答が行われた。一日目の講演発表会終了後、同大学の学生会館において懇親会が盛大に行われ、会員間の懇親が大いに深められた。部会役員会は、部会の1日目の午前中に愛媛大学城北キャンパスで開催され、行事、役員の交代、会計報告、次年度の開催計画等が審議・了承された。また、部会会則に基づく選挙により平成17年度の部会長に山本弘幸氏が選出された旨報告があり、承認された。また、平成17年度の部会は、愛知県の名城大学で開催することが承認され、開催地委員長に道家紀志氏が、開催地幹事に川北一人氏が承認された。これらの審議・承認案件は、同日午後の部会総会で提案・審議され、全て承認された。総会終了後、一般講演に先立ち、部会長講演(神戸大学、眞山滋志)が「植物疾病における特異的抵抗性現象の解明を目指して」と題して行われた。
(眞山滋志)

⑤九州部会

部会活動状況で述べたように延期されたため、次号に掲載いたします。

【書 評】

米山伸吾・安東和彦・都築司幸編：『CD-ROM 付 農薬便覧』第10版 B5判 2,322頁、発行：平成16年8月 農文協 ¥23,000

本書は昭和34年の初版以来、改訂を続け、平成14年3月に第9版が発行されたが、その直後の同年7月、無登録農薬の販売、出荷、使用実例が発覚し、使用農産物出荷の自粛などの事態を招いた。これを受け、農薬取締法が平成14年12月と15年6月の2度にわたって大幅に改訂された。無登録農薬の製造・輸入・使用・農薬使用基準に違反する農薬使用が禁止され、法律に違反した業者や使用者への罰則も強化された。

この期に望み、著者らはいずれも農薬会社や試験研究機

関で病害虫防除技術の開発あるいは農薬の開発登録に長年打ち込んできた方々により従来の内容を一新した。構成は農薬取締法改正の要点、農薬使用上の注意、殺菌・殺虫・殺菌殺虫混合剤、除草剤、植物生長調整剤、殺そ剤、鳥獣剤、殺菌殺虫除草生長調整剤と複合肥料との混合剤〈農薬肥料〉、展着剤、その他新規・失効農薬情報、さらに作物別防除法、付録として農薬登録における適用作物のグループ化、経過措置により使用が承認された作物と農薬、農薬混用事例、農薬が蚕に被害が無くなる安全基準日数、農薬取扱会社一覧など網羅しかつ詳述している。

本書の特徴は登録農薬（4,922剤）のすべての適用対象と使用方法を網羅、取り扱いメーカーを明記し、メーカーごとの登録適用内容の違いや主要作物の適用農薬がわかり、農薬の正しい安全使用に役立つ付録が豊富であり、目的の項目あるいは農薬選びをすばやく検索できるCD-ROM付きである。

なお、本書は平成15年9月30日現在の登録農薬、平成16年2月末までの新規登録農薬と失効農薬を収録されたもので、それ以後の農薬情報は逐次農水省、(独)農薬検査所、または(社)日本植物防疫協会のホームページからそれぞれ補完する必要がある。特に各都道府県別で問題になっているマイナーな作物や緑化樹木などの農薬の適用拡大については今後格別な対策が採られる情勢にある。

農薬は有用な植物の安定した生産保護保存に欠くべからざる農業資材である。また、本書から読み取れるように安全で安心な機能的農薬や生物農薬の開発実用化が進んでおり、多発あるいは流行する病害虫、帰化害草、年々増え続ける新病害虫の防除法検索の参考書としても有用である。

(高橋幸吉)

【学会ニュース編集委員コーナー】 情報提供および投稿のお願い

本ニュースは身近な関連情報を気軽に交換することを主旨として発行されております。会員の各種出版物の御紹

介、書評、会員の動静、学会運営に対する御意見、会員の関連学会における受賞、プロジェクトの紹介などの情報をお寄せ頂きたいいたします。

投稿宛先：〒170-8484 豊島区駒込1-43-11

日本植物防疫協会ビル内

学会ニュース編集委員会

FAX: 03-3943-6086

または下記学会ニュース編集委員へ：

松山宣明、阿久津克己、加来久敏、堀江博道、富岡啓介、各委員宛

編集後記

今年も残すところ2ヶ月となり気ぜわしくなってきました。毎年この時期になると、各地の部会や同時開催のシンポジウム・若手研究者の会などの便りが寄せられてきます。九州部会は台風の影響で11月に順延となった由、主催者のご心労にご同情申し上げます。その他、第1回教育プログラム技術講習会、第40回植物感染生理談話会、第22回土壌伝染病談話会の開催報告など熱気溢れる学会活動の様子が伝えられて来ました。是非ご一読下さい。また、永年会員長江春季氏及び西澤正洋氏の訃報が届けられました。これまでの本学会に対する両氏のご尽力・ご協力に感謝いたしますとともに、心からご冥福をお祈り申し上げます。

(松山宣明)

会員のご逝去

永年会員長江春季氏は平成16年8月10日に、西澤正洋氏は平成16年10月20日ご逝去されました。ここに謹んでご冥福をお祈り申し上げます。